

# 「戦争の記憶を継承するデジタル・ストーリーテリング実践」

小川 明子（名古屋大学大学院 情報学研究科）

## 1. はじめに

戦後70年が過ぎ、戦争体験者が高齢化し、直接的な戦争体験の語りが困難になりつつあるなか、体験者の語りをいかにメディア化、アーカイブ化するかに注目が集まっている。デジタル・デバイスの普及やインターネットはその流れを推し進めているといえる。

一方で、興味深い流れとして、非体験者による語り継ぎも模索されており、戦争関連資料館のガイドや学生、ひいてはライフ・ストーリーの執筆者らが、いかに体験者の語りを聞き、解釈し、それを執筆したり、再提示したりするのかといった、いわば共著者としての役割が注目されている(富永佐登美・葉柳和則, 2010, 富永, 2013, 八木良広, 2015)。

## 2. 実践と研究の目的

上記の問題意識は、筆者らが展開してきた協働的なデジタル・ストーリーテリング実践『メディア・コンテ』のコンセプトとも重なる。この実践では、周縁的な立場に置かれがちな人びとの声を、学生たちがファシリテーターとして聞き、その経験や想いを協働的に物語化したのち、写真と声を用いて2分程度のスライドショー形式の映像として表現し、ウェブで公開してきた(小川, 2016)。こうしたメディアを用いた「共同執筆」の感覚は、八木の提示する「ライフ・ストーリーの共著者」の概念とも重なりを持つだろう。

本実践は、戦争体験者の記憶のメディア化を実践の目的としつつ、同時に1)戦争の記憶をメディア化する際の課題を抽出するとともに、学生が協働的に制作することで、2)表現する側が記憶を継承する際の課題や可能性を探索することを目的として行った。

## 3. プログラムと作品概要

### 3.1. メディア・コンテ ピースあいち

#### 3.1.1 プログラム概要

一回目の実践は、民間の資料館「戦争と平和の資料館 ピースあいち」で、名古屋大学大学院国際言語文化研究科開講のコミュニティ・メディア論の最終実践として行った。

日時：2016年1月30日 11:00-18:30

参加者：ピースあいち 語り部6名

ファシリテーター：大学院生／研究生計8名

機材：iPad / Reel director II

11:00 活動の説明

11:10 持ちものがたり (アイスブレイク)

11:30 インタビュータイム

12:15 昼休憩

13:00 5コマ紙芝居制作 (物語案制作)

13:40 物語／表現案発表, アドバイス

14:40 絵コンテ制作／編集作業

16:10 ナレーション録音

17:30 上映会



図1 インタビュータイムの様子。付箋を使い、物語の種を拾い、組み合わせていく。

#### 3.1.2. 作品概要

作品テーマは、参加者の年齢によって二つの傾向に分かれた。当時小学生だった参加者は疎開、特に食生活の困難を語り、中学生／女学生だった参加者は、情報／言論統制をめぐる経験や教育への不満をテーマに選んでいる。

- ・ 食べ物の苦い追憶 (疎開中の食生活)
- ・ 小学生の見た戦争 (空襲と疎開生活)

- ・ 時代の教科書（疎開生活と教育勅語）
- ・ 空襲から救出したアルバム（時代の空気）
- ・ スカートの白線が目にしみる（軍国少年が感じた終戦）
- ・ 今だから話せる（通信兵の記憶）

### 3.2. 愛知・名古屋戦争に関する資料館

#### 3.2.1. プログラム概要

二度目の実践は、名古屋市の担当者との間で提案され、前回の反省から、歴史的事実のアドバイザーとして、学芸員 松下佐知子氏と資料館アドバイザー、東海高等学校西形久司先生の協力を仰ぎつつ行われた。また資料館からは所蔵資料の撮影協力や所有する写真資料の提供を受けた。

有志のファシリテーターには事前説明を一日目午前に行い、表現への関心を刺激するため、心象風景やメタファーをいかに表現するかに着目したアイスブレイク活動を行った。制作スケジュールはピースあいちとほぼ同じ内容を2日に分けて行ったが、参加者の都合がつかず部分参加というケースも多かった。資料館によれば、資料提供者らに参加を依頼したものの、健康上の理由などで断られたケース自体、非常に多かったという。ファシリテーターが結果的に多く、それゆえにストーリーの方向性が決断できない状況が生まれたことが反省点である。

日時：2017年7月25-26日 10:00-18:30

参加者：資料提供者4名

ファシリテーター：大学生/社会人有志計5名、名古屋大学大学院生4名

機材：iPad / Reel director II

#### 3.2.2. 作品概要

- ・ 「折られた花」（戦中の看護学校の経験）
- ・ 「空になったリュックサック」（満州引揚）
- ・ 「満州で過ごした少女時代」
- ・ 「橋の向こう」（岐阜空襲の記憶）

本実践では、ファシリテーターの学生らと直前にメタファーを用いた表現についてワークショップを行ったためか、タイトルや内容にメタファーを意識した作品が目立った。

また本実践での作品は、2018年1月現在、資料館内のモニターで常時上映されている。



図2 プロジェクターの影を用いた表現（看護学生が空襲後、爆弾で吹き飛ばされた手足を膿盆に載せて運ぶシーン）（愛知・名古屋戦争に関する資料館 2017）

## 4. 考察

### 4.1. 制作用写真アーカイブの必要性

そもそも戦時下の人びとを記録した写真はきわめて限られ、またメタファーで表現するにしても、戦時下の苦しい生活を、飽食の時代に短い時間のうちに写真で表現することは困難であった。二つの実践共に、資料館のご厚意で、所蔵物の写真使用や撮影の許可が得られたものの、史料的価値からそれらを実際に着たりかぶったりして写真を撮ることはできず、いかにストーリーを説明、表象する写真を調達するかは依然課題として残った。今後、いかに制作に「使える」資料を確保できるかがメディアを用いた語り継ぎにおいて重要になるとと思われる。なお、資料として誰もが制作等に使うことができるサイトとしては、アメリカ公文書館のアーカイブが有益であった。

### 4.2. ファシリテーターの経験

#### 4.2.1. 公的な記録と私的な記憶のあいだ

デジタル・ストーリーでは、客観的な事象の説明よりも、当事者の経験や視点、想いの表現が重視される。また協働的なデジタル・ストーリーテリングでは、インタビューを通して、人びとの間主観性を通じた他者理解を試みてきた。ファシリテーターとして参加した学生たちは、自分たちの世代にとっても戦

争を身近なものとして捉えられるようにと、何度も質問を繰り返し、対話しながら語り部たちの個人的な記憶や想いを掘り起こそうと試みたが、「当時の社会を説明する話だけが長く語られ、当時の暮らしについて最初はほとんど語られなかった」「本人の（個人的な）記憶を残していくことの意義をどう参加者に伝えるかが難しかった」とその困難を指摘している。参加者の中には、当初、個人の記憶や想いを語ることに戸惑いが見られ、こちらから依頼したわけでもないのに、ほとんどの参加者が、何らかの公式記録と重ね合わせ、年表に自らの記憶を沿わせる傾向も見受けられた。結果的に、院生たちの問いかけと対話を通して、ストーリーには個人的経験や身近なエピソード、当事者の感情が相当織り込まれたが、個人の記憶をパブリックに語りだす困難もまた浮かびあがった。

#### 4.2.2. 啓発の回路と物語経験

ファシリテーターたちは、自分たちの戦争をめぐる知識や物語、身近な人びとの語りを思い起しながら参加者の語りを理解しようと試みた。ある中国からの女性留学生は、イナゴやサツマイモの茎等、普段馴染みのない日本語を参加者に説明してもらいながら話を聞いたが、そのとき彼女が状況を想像することができたのは、同様の経験を「祖母が多少教えてくれていたおかげ」と述べている。一方、別の院生（女性）は、「戦争は悲惨だ。だから戦争はしてはいけないというのが行き着く先になりがち」とも指摘する。実際、ライフ・ストーリー研究の八木(2015)は、戦争をめぐるのは、ある方向へと水路づけようとする「啓発の回路」と名付けられる社会的装置が、日本社会を生きる人びとを、「適切な」認識へと導いていると評価しつつも、その回路に理解と思考をゆだねることが、外在的に与えられる情報にただ依存するということになりがちだと批判的に論じている。

上記の院生たちのコメントも図らずもその二面性を照射しているだろう。啓発の回路と

いう社会的装置が機能しているからこそ、自分が経験したことの無い戦争の語りを想像、解釈できる一方、委ねすぎると個別の経験や想いを反映した印象深い表現や主体的な他者理解に結び付かないというジレンマが浮上する。本稿で述べてきたような小さな実践もまた、こうした「啓発の回路」とは無縁ではられないことに気づかされた。

※本報告は、小川(2017)を修正、加筆したものである。作品はすべて『メディア・コンテ』ウェブサイト(<http://mediaconte.net/>)のシアター頁から視聴可能。

#### 参 考 文 献

- 富永佐登美・葉柳和則(2010)「非体験者にとっての継承活動の現状 -長崎・元平和案内人への聞き取りからの考察」長崎大学総合環境研究 12(1), pp. 29-40
- 富永佐登美(2013)「語りの継承における課題と可能性 -平和案内人の活動を手がかりとして」長崎大学東アジア共生プロジェクト ワーキングペーパー 8, pp. 1-9  
[http://asia.prj.nagasaki-u.ac.jp/NU\\_EA\\_kyosei\\_WP\\_2013\\_8.Tminaga.pdf\(accepted\)](http://asia.prj.nagasaki-u.ac.jp/NU_EA_kyosei_WP_2013_8.Tminaga.pdf(accepted)) 最終アクセス 2018. 1. 15)
- 竹沢尚一郎編著(2015)『ミュージアムと負の記憶 -戦争・公害・疾病・災害:人類の負の記憶をどう展示するか』東信堂
- 八木良広(2015)「ライフストーリー研究としての語り継ぐこと」桜井厚・石川良子編『ライフストーリー研究に何ができるか -対話的構築主義の批判的検討』新曜社
- 小川明子(2016)『デジタル・ストーリーテリング -声なき想いに物語を』リベルタ出版
- 小川明子(2017)「負の記憶を記録することの可能性と困難-二つのデジタル・ストーリーテリング ワークショップをめぐる覚書」名古屋大学大学院国際言語文化研究科『メディアと社会』9号 pp. 71-86